

木曾願書

シテ 木曾義仲

立衆 従兵

トモ 立衆中の一人

ヲカシ 里人

ツレ 覚明

ワキ 今井兼平

地は 越中

季は 夏

一声立衆「八百万代を治むなる。弓矢の道こそ久しけれ。

シテ「抑是は。木曾義仲とは我事なり。

立衆「さても平家は越前の。燧が城を攻め落し。都合其勢十万余騎。此砥並山まで攻め下る。

シテ「こゝには源氏。

立衆「かしこに平家。両陣相さへ。龍虎の威をふるひ。

獅子象の勢。帝釈修羅の思ひをなし。

上歌「日月も手の内に。く。とりぐなれや梓弓の。

矢叫びは雲にひゞき。関の声は俱梨伽羅の。谷風も烈しく。山河草木も震動す。されども味方の計略。明日の合戦と触れければ。敵味方に矢をとゞめ。くつばみを返し砥並山。明くる空をぞ待ちるたる。く。

シテ詞「如何に誰かある。

トモ「御前に候。

シテ「あの茂みの中に。新しき社壇の見えたるは。如何

なる神を勧請申したるぞ尋ね来り候へ。

トモ

「畏つて候。如何に在所の人の渡り候ふか。

ヲカシ

「何事にて御座候ふぞ。

トモ

「あれに新しき社壇の見えて候ふは。如何なる神を
勧請申してあるぞ。

ヲカシ

「さん候始めて八幡を勧請申して候。今八幡とも又
在所を羽生と申すにより。羽生の八幡とも申し候。

トモ

「如何に申し上げ候。在所の者に尋ね申して候へば。

新しく八幡を勧請申して候ふが。今八幡とも申し。

又羽生の八幡とも申すよしを申し候。

シテ

「近頃めでたき事にて候。やがて社参申さうずるに
て候。覚明を召して願書をこめ候へ。

トモ

「畏つて候。如何に覚明御参り候へ。急ぎ願書を書
きて御こめあれとの御錠にて候。

覚明

「畏つて候。やがて仕らうずるにて候。

サシ立衆

「今井樋口を始めとして。其数多き兵ども。皆悦び

の色をなして。

地「急ぎ社壇に参りつゝ。く。信心を致し取り分きて。願書を読み上げ。猶神徳を仰がん。

シテ「何々帰命頂礼。八幡大菩薩は。日域朝廷の本主。累世明君の曩祖たり。

地「宝祚を守らんが為め。蒼生を利せんが為めに。三身の金容を顕はして。三所の権扉を押し開き給へり。こゝに頻の年よりこのかた。平相国といふ者

あつて。四海を掌にし。万民を悩乱せしむ。是れ仏法の怨み王法の敵なり。抑曾祖父前の陸奥守。名を宗廟の氏族に帰附す。義仲いやくも。其後胤として此大功を起すこと。喩へば嬰兒の蠱を以て巨海を測り。螳螂が斧を取つて。隆車に向ふ如くなり。然れども君の為め国の為めに。是を起すのみなり。伏して願はくは。神明納受垂れ給ひ。勝軍を究めつゝ。仇を四方に退け給へ。寿永二年

五月日と。高らかに読み上ぐれば。

シテ

「義仲願書に鎬矢を。神前に捧げ申せば。御供の兵ども。上差の鎬を一つづ。彼宝前に捧げて。南無帰命頂礼。八幡大菩薩とて。皆礼拝を参らする。

一声ワキ

「寄せかくる。汀の波のおのづから。音も烈しき朝嵐。

詞

「如何に平家の軍兵たしかに聞け。抑是は木曾殿の御内に。今井の四郎兼平。今日追手の大将と名乗

り呼ばゝる其声は。天地も響くばかりなり。

地

「今井が合図の鬨の声に。後の林の五万余騎。一度に鬨をどつと作る。

地

「平家は其勢十万余騎。く。時もこそあれ五月闇。暗さは暗し巖石巖の。敵も味方も同士討すなど。魚鱗鶴翼定めもなし。

シテ

「かゝりける処に。

地

「かゝりける処に。羽生の八幡の社壇の上より。神

火一村飛び上つて。源氏の軍兵の闇を照らす。光の影をよくく見れば。鳩鳥を戴く忍辱の御鎧。

悪魔降伏の白羽の鎗矢を。平家の陣に射給ふと見えしが。平家の大勢取る物も取りあへず。倶梨伽羅が谷の。巖石の上に走りかゝり。落ち重なりく。馬には人々には馬。雪のしづえや霜くづれ。積る木の葉の塵ひぢの如く。七万余騎は倶梨伽羅の。谷の千尋の深きをも。浅くなる程埋めたり

けり。